

『ためらい』をめぐって

ジャン＝フィリップ・トゥーサンの最新作である本書『ためらい』 (Jean-Philippe Toussaint, *La Réticence*, Les Éditions de minuit, 1991) は、八五年『浴室』でデビューした著者にとって、四番目の小説である。『浴室』の主人公の「ぼく」は、二十七歳。空の浴槽の中にもぐり込んでこんな風に述懐していた。「危険を冒さなきゃだめなんだ、この抽象的な暮らしの平穏さを危険に晒して、その代わりに。」そう言って彼は言葉に詰まっていたのだが、『浴室』から六年たって、『ためらい』の「ぼく」は、生後八カ月の息子を乗せた

ベビーカーを押しながらわれわれの前に登場する。人の子の父親になるとは想像しにくかったトゥーサンの主人公だが、時は流れた。「ぼくは三十三歳、つまり青春の終わる歳を迎えたところなのである。」韜晦に満ちたトゥーサンの文章としては驚くほど「へ生の声」に近い、ある種の諦めと決意とを明確に伝える一文だ。作者の実人生の歩みと、作品世界の進展とが、「ためらい」ではこれまでになく直接的に結びついたという印象を受ける。事実、本書執筆の頃にトゥーサン自身、男の子の父親になったのだし、また本書は「マドレーヌ」、つまり作者自らの妻に捧げられている。

人生の転換点に立って、これまで「ミニマリズムの才人」として遇されてきたこの作家は私小説を紡ぎ始めたのだろうか？　だが、前作『カメラ』についてトゥーサンが述べていた「ぼくが書いたのは、何も扱っていない本です」という言葉は、本書にもそっくりあてはまる。それどころか、何もないとともに

小説を成り立たせるという姿勢は、本作においていっそう極端な形で押し進められている。筋もなく、目立ったアクションもない。海辺の村に滞在する「ぼく」の日記のような記述が続き、そこにさまざまな徴が明滅する。徐々にサスペンスを漂わせ、ミステリーの興味さえ濃厚に喚起しながらも、しかしそれらの謎めいた徴が、微に入り細に渉る描写の果てに指し示すのは、一個の「無意味」なのだ。驚くべき力業だが、同時にまた読者を面食らわせかねない実験でもある。

本書に対するフランスでの評価は、面白いくらいにはつきりと分かれた。『ヌーヴェル・オプセルヴァトゥール』誌がいち早くページを割いて、「ここに、おそらくこの世代で最も想像力豊かな作家がいる」と、全面的賞賛を捧げたのに対し、『ル・モンド』紙は「トゥーサンの賭は外れた」という見出しを掲げ、作者は小説の新しい道を探索して袋小路に陥ったと断じた——ただし「トゥー

サンの袋小路の方が、たいていの作家たちの見事な成功よりも面白いという点にこそ、文学の不公平がある」という遠回しの賛辞を付してではあるが、『リベラシオン』紙にも『ル・モンド』紙と同じ趣旨の評が出た。

確かに、これは性急な読者ならば焦らされる体の作品だろう。だが、本書を何度か通読した訳者としては、読み返すほどに手応えが増す、奥行きの高い作品だという印象を強く持った。それはひとえに、文章の力によるものにはかならない。トゥーサンの文章は、ここで素晴らしい成熟を示している。時に淀み、時に波打ちながらゆったりと延び広がっていくその行文を辿るうち、読者は不思議な酔いを覚えずにはいないだろう。執拗な反復と微妙な変奏とが、語りに、催眠術のような効果を与えている。晩秋の海辺の村の曇り空や、真夜中の港の暗い海面から、呪縛的な魅力が生じてくるのだ。本作によって、ジャン・フリップ・トゥーサンは、魔術師のごとき文章家へと変貌したのである。

最後に、拙訳刊行に際し、きめ細かく御助力くださった集英社の方々、貴重な助言を惜しまなかった青木真紀子さん、ジャン・ガブリエル・サントニさん、そして毎回チャミングな表紙を描いてくださる杉田比呂美さんに深く感謝したい。

一九九二年十一月

野崎 欽